
機動戦士「ガンダム」

吉良飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士「ガンダム

【Nコード】

N1398S

【作者名】

吉良飛鳥

【あらすじ】

D・E（デベロップメント・イラ 英：development era）80

地球では人口が増え、資源・住む場所確保のためにコロニー開発計画を推し進めた

そのため世界は大きく四つになった。

アメリカ・ヨーロッパを中心とする欧米諸国連合（通称：EAVN）
中国・ロシア・インドを中心とするアジア連盟（通称：AL）
イブ
キエル

日本・オーストラリア・ニュージーランドを中心とする太平洋連邦

(通称：P F)^{ビーエラ}

アフリカ共同自治体(通称：A S G B)^{アスケブ}

この内緊張状態にあったE A V NとA Lの間に経済摩擦が理由で戦争が勃発し、中立であるP FとA S G Bには常に圧力をかけられていた。

そう、第二次世界大戦が始まっていたのだ。

第一話　平和な日に

太平洋連邦の一国、日本。

その某工業ハイスクールに通う学生空野翔太そらのしょうたは眠そくに授業を受けていた。

空野が眠りにつこうとしたそのとき、
ドーンズガズガズガガガ・・・
と大きな爆音と共に大きな振動が来た。

「じ・・・地震？」

と隣にいるマリー・スペクトルが呟きに近い声で聞いてきた。

空野「違う・・・これは・・・この振動の伝わり方は爆発・・・！」
そうしている内にまた先ほどの爆音と振動が来た。

先生は避難するように指示をだした。

空野「逃げるって・・・どこに？」

空野はこの振動が爆発だと確信しており、だとすれば狙いは学校の隣にある軍事基地という結果になるので実質逃げる所がない。

とりやえず外にでて、逃げるあてもなくさまよっていたら、
懐かしい影が見えた。

空野「つ・・・月夜見！！」

その影は立ち止り振り向いた。

月夜見「そ・・・空野じゃねえか!？」

普通ならどっかのレストランなんかで再開を喜びあうのだろうがそれは状況が状況なためそれはムリだ。

月夜見「ちよつと来い。お前に見せるものがある。」

月夜見は基地の一角に空野を呼び出した。

建物のような格納庫からでてきたのは今までにみたことのないものだった。

空野「モ・・・モビルスーツ・・・なのか？」

月夜見「P L - M S 0 0 0 0 機体名、デアフリード」

月夜見は空野に向き、

「空野、ちよつとこいつに乗ってくれないか？」
と言った。

ああと空野は了解し、
機体・・・デアフリードに乗り込んだ。

空野「通信回線オールクリア。エネルギー供給率を通常時からスクランブルミッションモードへ設定。メインシステム起動!」

月夜見から大体の説明を受けデアフリードを起動させた。

第二話 その名はガンダム

空野が観たのは焼けている町であった。

空野「みんな・・・無事だよな・・・！」

根拠はないけどみんな無事ということ望んでいた。

迫り来る戦闘機F-74、EAVNの主力戦闘機だ。

「ここで銃を使ったら万一に外れたときに町が吹っ飛ぶぞ・・・ここはビームサーベルを使うしかないか・・・」
と考えている内にEAVNの戦闘機の一つがこちらに機関銃を撃ってきた。

デアフリードはなんとか盾をだし回避運動をしていた。

空野は「コンノヤロー!!」と叫び、
袖の部分から淡いピンク色ビームサーエルを抜刀し、
一瞬にしてその戦闘機の翼を切った。

ほかの戦闘機にたいしても翼を切り裂いた。
そして残る一機はなにやらスピードを上げてこちらに突っ込んでくる。

空野は特攻かと思い盾を投げつけた。
なんとか特攻されずにはすんだが、空野の投げた盾は戦闘機のコックピットの部分を直撃し、爆発した。

司令部からの通信で基地に来るように言われたが正直基地には行く

気がしなかった。

基地に着きMSをしまつ格納庫まで案内され、そこでコックピットから降りたら拍手と共に月夜見が来た。

そして月夜見と共に軍のお偉いさんのところへ行つた。

そしたら、なぜか軍のお偉いさんは空野に

「君専用MSのところに行け」
と言つた。

わけもわからない俺に月夜見が無理矢理そのMSのところへ連れて行く。

空野「これは・・・！？」

月夜見「PL-L S 0 0 1 MS、機体名、ヘリオスガンダム」

空野「ガンダム・・・俺の機体・・・」

月夜見「お前の考えたLS-D、光速炉を始めて実装してあるぞ」

空野「ところで軍とは関係ないなんで俺の専用機が・・・？」

月夜見「お前はここの平和を守るにはまだ力が必要だと言つた」

空野「ああ言つた」

月夜見「これがその平和を守る力だ」

空野「軍に入れというのか？」

月夜見「そうは言わない。ただ、軍に入らないならこれは他の兵が使うだけだ。」

空野は少し考えながらいった。

「軍に入る。そうすればこの力が手に入るのであれば！！」

そして月夜見と空野は握手をした。

第三話　終わり無き戦い

ふう〜・・・

初めてガンダムを見たときから数えて3回目の模擬戦が終わった。

月夜見「なかなか腕が上がってきたな」

空野「いや、まだこの機体の性能にたよってばっかだよ」

月夜見「そんなことより、面会人がきてるぞ」

空野「面会人？誰だ？」

月夜見「あってみればわかる」

それを言うと月夜見は意味深に微笑みかけた。

月夜見に案内され応接室のような所に通された。

そこにはマリー・スペクトルがいた。

「久しぶりー」

いつもと変わらない調子で明るくマリーが話しかけてきた。

空野「おお、久しぶりだな」

空野も明るく応えてみせた。

マリーは空野の服装をみて、

「軍に入ったの？」

と聞いてきた。

空野は、何て答えていいのかわからず口任せに答えた。

「この服装で軍に入っていなかったら単なる軍ヲタクだろ」

マリーは、少し笑って、

「頑張つて」
と言った。

そこに、ウーウーウーとサイレンが鳴った。
空野は「マリー、むやみに動くな！軍人の案内にしたがえ！！」
と言い、走り去った。

空野は小型の通信機を耳につけ、オペレータであるソフィ・アンに
状況を聞いた。

ソフィ「太平洋上にEAVN軍と思われる戦艦及び戦闘機を確認」
空野は、まず戦闘機を数機落とした後、戦艦を沈めようと考えた。

タイミングを見計らったかのように月夜見から整備完了の連絡がき
た。

「感謝するぜ月夜見」と、空野は呟きヘリオスガンダムに乗り込ん
だ。

ソフィと通信を繋ぐ。

ソフィ「敵の戦力は、戦闘機15、イージス艦5、空母3です。」

空野「了解。援軍の可能性は？」

ソフィ「今の所は否定できないわ。」

空野「わかりました。発信許可をください。」

ソフィ「発信を許可します。射出タイミングをヘリオスに譲渡」

空野「了解。空野翔太、ヘリオスガンダムいきます！！」

勢いよくヘリオスは基地からでたら飛行変形になり太平洋を目指し
飛び立った。

第四話　太平洋の戦い

基地から飛び出し約1時間半ほどで戦場に着いた。

空野は

「思ったより早いな・・・普通の戦闘機ならどんなに急いだって3時間ほどはかかるぞ・・・」

とコックピット内で呟いていた。

見方の戦艦を発見し、識別コードを送り通信を開く、

空野「こちら、高萩日本防衛基地から派遣された空野翔太です。太平洋連邦軍、援護します。」

見方の戦艦のオペレータ「こちら、太平洋連邦軍第143ハワイ諸島防衛及び日本近海防衛小隊所属のアレースです。識別コードを確認しました。」

空野は長い肩書きだなと思いつつ、敵の状況を聞き、先ほど変わらぬが、やや太平洋軍が劣勢ということを知った。

アレースの指揮官が皮肉めいて「援軍というのは君だけか？」と聞いてきたのでないだけまだと返しといた。

空野「さてと・・・」

空野は気合をいれると、イージス艦に向かって飛んでいった。

イージス艦のブリッジを羽に備え付けている実体験で突き落としたかと思えば、

MSに変形し、イージス艦の後ろの方にビームサーベルを突き刺した。

それでイージス艦一隻が沈むと思ったときには、ちょうど上空をとんでいた戦闘機の左翼をビームサーベルで切った。

そしてまた飛行変形し、迫り来る銃弾を縫うようによけ、ビームサ

ブマシンガンを何発か撃ち5機の戦闘機を落とした。

再びMSに変形し、ビームサーベルで空母を沈め、さらにその近くにあった空母にも投げつけた。

これで三隻あった空母は残り一隻となりイージス艦も残り4隻さらには戦闘機も6機ほど失ったEAVN軍は撤退をし、空野も撤退許可をもらい基地に戻った。

そして、基地に戻りコックピットから降りたら祝福モードになっていたが、戦闘に疲れきった空野はその場に倒れるように寝込んだ。

第五話　大気圏脱出

D・E80　3/10

PL軍伊豆防衛基地

そこでは、PL軍の最新鋭戦闘母艦「アマテラス」の出港式をしていた。

ちなみに乗る人は134名ほどで、月夜見と空野も乗る予定だった。人事部の人が名前を読み上げている。

「・・・月夜見明大尉以上、技術部40名

マリー・スペクトル少尉、空野翔太少尉

以上、パイロット2名

・・・

副艦長、ジョージ・アデス中佐

艦長、ジョシユア・ニコラス中佐

指揮官、飯島直美大佐

以上134名が太平洋連邦最新鋭戦闘母艦アマテラスの乗組員である――」

とジョセフ・ラミアス准将が演説のような事をしていた。

そして、そのあと指揮官である飯島直美が

「本艦は月基地の援助に向かう。パイロットが二人しかいないが、少数精鋭ということで頑張っていたきたい。また――」

かなりの演説振りに空野はなんとか居眠りと欠伸をこらえていた。

指揮官の飯島直美が

「総員、所定の位置につけ――」

と号令を掛けたところで、

艦の中にある自室で大気圏脱出を待った。

空野は「ガンダムは船の中に入れてあるし、宇宙に行くには対Gシートに座ってればいいし・・・」

と独り言を呟いていた。

そして、念のために格納庫に向かい、ガンダムがあることを確認した。

そして、もう一つガンダムの名を持つMSが格納庫にあった。

空野は、「そういえば、パイロット2人だけなんだよな」と呟き、
「挨拶でもしてくっかー！」と伸びながら歩き出した。

そしてもう一人のパイロット、マリー・スペクトルの部屋の前に立ち、ノックをしようとした瞬間勢いよくドアが開き、空野の顔を強打した。

マリー「あっゴメンなさい……!!」

空野「いつ……いやボケっとしてたから……」
と頭をさすりながらマリーと目があつた。

マリー「そっ……空野君!？」

空野「マリー!？」

空野はビックリした。同姓同名の名前かと思ったけど、本人だとは思わなかった。

空野「どうしてここに？」

普通一番これが気になるだろう（多分）ことを聞いた。

マリーはビシッと敬礼をし、

「D・E・80 3/5軍に志願し、正式にガンダムのパイロットとなりました。階級は少尉です。」

と答えた。

空野は返礼をしながら

「3/5ってことは……俺が太平洋のと真ん中まで行って援助していたときか……だけとなんで？」

とつぶやいた。

マリーは、

「EAVNに攻撃されたとき、親を2人ともなくしたの……」
といい始めた。

マリー「そしてね、その時は私の胸が絶望感で一杯だったの。それで空野君が軍に入ってるって聞いて、真偽を確かめて、面会人として行ったわ。そして、私も思ったの……『私も戦わなきゃ』って。そして、模擬戦やって、実力はあって正式にガンダムのパイロットになったの。」

マリーの声は段々涙声になってきた。そこに、

「本艦はまもなく発進する。総員、各自の対Gシートで待機せよ。」
という放送が入った。

空野はマリーを彼女の対Gシートに座らせて、その隣にある空野の対Gシートに座った。

直後にカウントダウンが始まり、

発射したと同時にものすごい衝撃が襲ってきた。

それから大気圏をこえるのに何時間かかったかはわからない。だけど、気付いたらGの圧力から解き放たれ、無重力のおかげで体が浮きそうになっていた。

気付けば、マリーの手が空野の手の上にあった。不思議とマリーと目があう。

そこに、飯島直美指揮官からの艦内放送で、ガンダムのパイロットはブルツチに来说いと言われ、空野とマリーはブルツチに向かった……いや、向かおうとした。しかし、無重力のおかげで、体と思うように動かない。

なんとか無重力での動きになれば、ブリッジについた。

飯島直美は、

「無重力での移動方法は難しかったそうだな」

と、言いふつと笑った。

そして、飯島直美が

「早速だが、二人にミッションを――」

といいかけた所で、

オペレータのソフィ・アンが、

「3時と9時の方向に高熱原体急速接近を察知――！」

と急ぐような感じで言った。

それに、いち早く空野が反応し、

「敵か！？数はどの位だ？」

と聞いた。

ソフィ「3時の方向、敵20。9時の方向、敵30！……これは・
・……！」

空野がどうした？と聞く前に、「モニターに映します」とソフィが
手元で操作を始めた。

そこには、人型の機動兵器モビルスーツ（MS）が移っていた。

空野は緊急であるかのように、

「飯島大佐――！」

と怒鳴りつけるかのように呼んだ。

飯島大佐とのアイコンタクトが成立し、

飯島「宇宙に来て間もないが、本艦はまもなく戦闘に入る。

総員第一戦闘配備。パイロットは自分の機体にて待機せよ！」

と、落ち着きながらも、大声で指示を出す。

空野も、マリーを引っ張って格納庫に着いた。

飯島大佐から通信が入る。

「まもなく射出する。状況は、ハッキリ言っただけかなり厳しい。しかし、これだけは言わせて貰う・・・死ぬなよ」

空野も、マリーも、これに対して「了解」

と応えた。

マリーへ通信をつなぐ・・・

「マリー、君は3時の方向を頼む。こっちは9時の方向をやる」

これにたいして、マリーの返事は、

「わかったわ・・・」

と言った。

船の両脇にあるハッチが開く。

ソフィの「射出タイミングを譲渡」

の言葉に合わせて、

空野 「空野翔太、ヘリオスガンダム、行きます!!」

マリー「マリー・スペクトル、メビウスガンダム、発進します!!」

といいそれぞれのポイントへ行った。

第六話　宇宙戦

「9時の方向に敵30、3時の方向に敵20か・・・」

飛行変形したヘリオスガンダムのコックピット内で空野はそう呟いた。

空野とマリーのガンダムの性能差は次のとおりだ

・ヘリオスは飛行変形できるがメビウスはできないしかし、メビウスには両肩に鳥を連想させる大きな翼がある。

・ヘリオスは接近戦仕様で、メビウスは遠距離仕様である。そのため、機動性は、ヘリオスの方が勝っているが火力はメビウスの方が優れている

大雑把に言うところのような感じである。

そのため、後方でマリーの援護を受けつつヘリオスは敵部隊を内側から攻撃するという戦闘シミュレーションをこなしてきたが、まさか、こう別れてくるとは思わなかった。

ヘリオスを飛行変形させたままサブマシンガンを打ち込みながらMSの群れに飛び込み、両サイドの実体剣で敵MSをコックピットごと両断し、MS変形をしたかと思えば、そこから出てきた二本のビームサーベルで数機のMSコックピットごと突き刺した。

空野はマリーの状況が知りたくてマリーに通信をいれた

「マリー、そっちはどうだ？こっちはのこり十数機つてところだ」
マリーから通信が入る

「こっちは残り10機もないわ。今からそっちの援護に行くわよ」
空野は「了解」と返事をして、飛行変形し、敵の群れに入り込んだ。

しばらくするとマリーからの援護で、極太のビームが来た。
そのビームを回避した敵MSを次々に撃破していく。

敵の戦艦から帰艦信号らしき光がみえ、次々に敵が帰艦していった。
アマテラスからも帰艦信号が発射されたので空野とマリーは帰艦した。

第七話　アマテラス、月基地へ向け全速前進！

「とりあえず、お疲れ様」

と、飯島直美は空野とマリーにそう告げた。

空野は「とりあえず」の部分に引っかけり聞いた。

「『とりあえず』ってどういうことです？」

空野の問いに飯島直美はため息混じりに言った。

「私たちは今『戦争』をしてるの。また今見たく突然襲われるかもしれないわ」

空野「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・」

空野は、ここで初めて気づいた。「戦争」をしているこの事実を・

・

空野の隣にいたマリーが、飯島直美に、

「用があつて呼んだんじゃ・・・・？」

と申し訳なさそうに聞く。

飯島も、「ああ、そうだった」と言うように、モニターに現在の居場所の情報などを映し出した。

「実は、この近くにある小惑星基地を目指していたんだが・・・」

そう言い、モニターにその基地を出す。そしてすぐにモニターが切り替わり、

「この辺にEAVNの戦艦ふねと見られるものがいくつかあり、この戦艦を振り切つて、少し遠くなるが、月基地へ向かおうと思う」

そう言い、元から予定されていたルートと月基地へ向かうルートが表された。

飯島直美は、「これについて皆の意見を聞きたい。」と言った。

空野「意見と言うより質問なんですけど」

皆の視線が一斉に空野へ集中する。

飯島「なんだ？」

空野「あ、はい、この戦艦ふねが月基地へ行くのには賛成なんですけど、小惑星基地からの援護はあるのですか？」

飯島「今のところはわからないが、必要ならば援護するよう要請しておいた。」

空野「つまり、援護するかどうかはEAVNの動き次第ということでしょうか？」

飯島「そういうことだ」

空野「ありがとうございます」

マリ「あの、あたしからも質問なんですけど・・・」

空野に向けられていた視線がマリへ集中する。

飯島「なんだ？」

マリ「EAVNの戦艦ふねに動きが無くてもガンダムは当艦の援護につくのですか？」

飯島「一応そのようにしてもらうつもりだ。」

マリ「ありがとうございます」

飯島「以上、質問、意見はないか？本艦はまもなく月基地へ行く。

また、EAVNがすぐ目の前にいるため第一種戦闘配備！ガンダムは当艦の援護へつけ！アマテラス、月基地へ向け全速前進！！」

ブリッジにいる全ての人が一斉に

「了解！！」

と敬礼したのは言うまでもないだろう。

第八話　　鎗矢

空野「しかし、EAVNのほうもそれらしい動きを見せ無いな」
空野はコクピット内でそう呟いていた。

「こちらとらありがたいことだけど」と思っていたら目の前に信じがたい光景が広がっていた……

EAVNの艦の数が尋常ではないほど多いのだ。

空野はすぐさま直美にこれを報告し、援護を要請するように言った。
すぐさま小惑星基地から宇宙用戦闘機が集結した。

直美の指示の下、空野達は相手が攻撃してくるのを待った。

しばらくするとEAVNの艦からビーム砲がはなたれ、それが鎗矢となり戦闘が始まった。

アマテラスは逃げるかのようにドンドンとスピードを上げていく。

空野たちは艦から離れないように遠距離から射撃を行っていたが、しだいに敵が接近してくるので、ヘリオスを飛行変形させて接近した。

接近したら翼の実体剣で斬るつもりでいたが、それをうまく交わされてしまったので、

すぐさまMS変形になり、袖からビームサーベルを抜刀した。

そのまま敵MSにつっこみ、コクピットに向かって突き刺した。

そして他の敵とも戦っているうちにアマテラスが遠くへ行ってしまったため、

空野は急いで飛行変形したが、マリーもとり残されている様子で、空野は

「ドッキングしろ。ヘリオスが飛行変形で行けばすぐに追いつく！」と言ったが、マリーは

「この敵を高出力ビーム砲一気に排除するからドッキングして、その時の反動をうまく使えば作用反作用の法則で艦に追いつくわ」と言った。

空野「だけど、そんなことしたら下手すりゃ宇宙の果てに飛んでくぞー!」

マリー「その時はヘリオスの飛行変形とドッキングするわ」

空野は、マリーは絶対にこれをやる気でこれ以上言ったところでやるつもりだろうと観念し、

「失敗したら承知しねえぞ」と言いつつ、ドッキング用コードをだしメビウスに接続した。

マリーの「行くわよ!」の声でビーム砲を発射した。

空野もLS-Dの出力を調整しながら向きをアマテラスに向ける。

「うおおおおおおおおお!」

マリーと空野は一斉に叫んだ。

敵は次々に撃破され、空野とマリーは無事にアマテラスに近づくことができ、ドッキングを解除する。

マリーが通信で空野に

「ありがとう」

と言った。

空野はそれに対し

「お前を信じてやったただけだ」
と言った。

そして、アマテラスに着艦した。

第八話〜鎧矢〜（後書き）

さてとつ、初めてあとがきをかく気がするけどまあ多分気の所為だ（笑）

次回にはきつと月基地に行く予定です（あくまでも予定です）。

本家本元のサンライズの新ガンダムはガンダムAGEかぁ・・・

なんでもターゲットは小学生か（´・ω・｀）

と言いつつ観る予定ですけど（´・`・´）

まあ、オリジナルの「ガンダム」のほうもよろしくお願いしまーす
つと。

でわでわ

第九話　月

空野「すげー」

マリー「これが・・・地球・・・」

空野とマリーは生まれて初めて宇宙から地球を見ていた。今更かと思うかもしれないが、今までは宇宙戦で、地球を見ているどころかじゃなかったのだ。

自分たちが月基地へ行く理由は、燃料や物資の調達と、新しい機体を作ること。それから新しいパイロットの迎えに行くことだ。

元々は、月基地へ行く前に、小惑星基地で燃料を調達する予定だったのだが、状況が状況だけに、そのまま月基地へ行くことになっていたのだ。

ブリッジ

ソフィ「入港シーケンス確認」

ジョシュア「アマテラス、入港せよ」

アマテラスは月基地へ入港した。

月

元々は野ざらしにされていたそうが、今は観光地として人気を得ている。

また、ほとんどの軍が月基地を作ったため、「絶対的平和な観光地」と嫌味を込めて言われていることがある。

艦のほとんどが、飯島直美大佐に許可を貰い、遊びに出かけた。
空野とマリーも許可をもらい、月夜見も誘ったが
MSの製造があるとのことと月夜見にお土産を買うことを約束し、
遊びに出かけた。

第十話　桐生ルーク

飯島大佐「今日からお前達も学生だ」

空野& a m p・マリー「……………はい？」

月の繁華街から艦に戻るとそう飯島大佐に言われた。

飯島大佐「聞こえなかったか？お前達は今日から学生なのだ。学生らしく勉強に励めよ」

空野「…………大佐、学生ってどういうことでしょうか…………？」

飯島大佐「うむ、ここにいる間は敵も襲撃してこないだろうし、月面基地には世にも珍しいP L軍教育機関高等部。略して軍高がある。私もかつて在籍していた。」

空野& a m p・マリー「は……………はあ……………」

飯島大佐「そこにいるお前達より1個上のやつが新しいガンダムのパイロットだ。」

空野& a m p・マリー「新しいガンダムのパイロット……………」

飯島大佐「そうだ。明日の7：00に艦の前で待ち合わせている。

名前は桐生ルークだ。」

空野「桐生ルーク……………わかりましたその人と艦の前で会えばいいんですね」

飯島大佐「そうだ。」

空野& a m p・マリー「了解」

翌日

「やあ、君達がガンダムのパイロットだね？」

と背の高い高校生あたりの人が聞いてくる。

空野& a m p・マリー（背高！！）

と思いつつ

空野「はい。空野しょ・・・」

桐生「空野翔太とマリー・スペクトルだね？空野がヘリオスガンダムのパイロットでマリーがメビウスガンダムだね？」

空野「はっ、はい・・・」

桐生「そんなにかしこまりなさんなつて。俺の名前は桐生ルーク、新しいガンダム・・・PL-L S003MS、ガンダムアマツラの時期正式パイロットだ。よろしく！」

と手を差し伸べてきた。

そして空野↓マリーの順で手を差し出す。

そして、学校に向かう。

桐生「へっ、それじゃあ、基地の隣にあった学校ってお前らの学校だったのか？」

空野「ええ。そして色々あつてガンダムに乗ってるわけですよ」

桐生「人生の修羅場を潜り抜けてんだねえ」

マリー「それほどもないですよ」

学校に着いたらいつもの癖で寝てしまう

ゴチン！！

空野「って！！」

教官「授業中に寝るとは随分とお偉い身分だな、少尉」

空野「申し訳ありません」

と殴られた所を抑えながらあやまる。

そこに

ウーウー

とサイレンが鳴る

シグナルレッド、シグナルレッド

総員避難せよ総員非難せよ

但しガンダムのパイロットはアマテラスへ行け

繰り返す総員非難せよ但し、ガンダムのパイロットはアマテラスへ行け

空野「行くぞマリー!!」

マリー「ええ」

廊下を走っていると、桐生先輩と合流した

空野「桐生先輩!!」

桐生「先輩はいらん」

マリー「桐生さん」

桐生「それでいい」

と走りながらアマテラスについた

第十一話　テロリスト

空野「テ、テロリストオオオオ!?」

ブリッジに空野の叫ぶ声が響き渡る

飯島大佐「そうだ」

「いつも通り冷たく言う」

桐生「それで、テロリストさんの居場所はどこですか?」

飯島大佐「全ての基地のちょうど真上だ。そのため、ほとんどの軍はまともに動けん。しかし、ここは違う」

マリー「どういうことですか?」

飯島大佐「ここは地下で、ちょうど出口には今テロリストはいない。恐らく、目視できるものと、やつらが知っているところにしか群がっていないんだろう」

空野「わかりました。その出口からガンダムを発進させて、テロリストを駆逐または拘束すればいいんですね?」

飯島大佐「物分りが早いな。なあに心配する事は無い向こうにはM^{モビル}ス^スは無いからな」

桐生「んで、俺への出撃許可は?」

飯島大佐「宇宙作業用M Aに武装を積んだやつに生身で戦うか?」

桐生「やめさせていただきます!!」

飯島大佐「ということだ二人でやれ」

空野「& amp; マリー」は、はあ・・・」

と、二人で格納庫に向かう

空野「月夜見、ガンダムの修復状態は?」

月夜見「万全だ。」

空野「そうか。桐生さんのガンダムさっさと作ってやれ、相当落ち

込んでるぞ」

月夜見「了解」

とガンダムのコックピットに座る。

空野「こちらヘリオスガンダムの空野翔太、発進許可をください」

マリィ「こちらメビウスガンダムのマリィ・スペクトル、同じく発進許可をください」

ソフィ「ヘリオスガンダム、メビウスガンダム発進を許可します。ハッチ開放します」

と言うと、艦のハッチが開き、さらに、地下の出口のハッチが開いた。

空野「空野翔太、ヘリオスガンダム、行きます！！」

マリィ「マリィ・スペクトル、メビウスガンダム、発進します！」

と、宇宙空間へ飛び立った

第十二話　命の重さ

テロリスト達は基地という基地を制圧していた

空野はマリーに通信する

空野「こちら空野。牽制目的での攻撃をするけど、マリーはやるな」
マリー「了解」

と空野のガンダムはマシンガンでテロリストに向けて撃つ

テロリストは空野に注意を向けたとたん、

PL軍がMAを射出し、テロリストを一網打尽にする

しかし余りもノモ居るわけで……

空野「今だ、マリー!!」

マリー「了解！」

と極太ビームを発射する

これで終わりだと思ったら他の基地に居た
テロリスト達が一斉に向かってきた

空野はMS変形し、マシンガンで牽制する。

そして、制圧されていた軍が動き出した

空野は、テロリストを拘束するために

カーボンネットを発射し、絡ませるが、

その機体は自爆した

空野は、特攻してくるテロリストにも同様にしたが、やはり自爆した。

残るテロリストも特攻するか自爆するかで、この戦いは終わった。

空野「・・・・・・・・・・・・・・・・」

マリ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

暫く無言が続き、マリと空野は着艦した。

空野たちは、嫌でも命の重さというものを実感した

第十三話　PL・LS003MS、ガンダムアマツラ

月夜見から、新しいガンダムが完成したとの連絡を受け、桐生と空野とマリーは格納庫に来ていた。

月夜見「これが新しいガンダム・・・PL・LS003MS、ガンダムアマツラです」

そこにあつたのは、赤と白を基調とし、額には金色のV字があるガンダムがあつた。

桐生「おお、これが俺のガンダムねえ」

月夜見「ヘリオスガンダムに新武装を取り付けたので試験もかねて模擬でもしてみたらいかがでしょうか？」

桐生「いいのかい？よし！空野、頼んだ」

空野「了解。ところで新武装って？」

桐生「新武装を知らないのか？新武装とは新しい武器のことだ！！」

空野「誰もアンタに聞いてません」

桐生「（・・ω・・）」

空野「これ（桐生）は置いといて、何を用意してくれたの？」

月夜見「連結銃だ」

空野「連結銃？」

月夜見「腰に拳銃が見えるだろ？あれはあれで単体で二丁拳銃として使えてさらに合体すると」

空野「スナイパーライフル」

月夜見「その通りだ」

そして、空野たちはパイロットスーツに着替え、それぞれのガンダムに乗り模擬戦を行うためのポイントへ行く。

空野「いいんですか？いきなり俺なんかと」

桐生「問題ないさ、今は挑発と受け取っておこう」

空野「なら、空野翔太、ヘリオスガンダム、行きます!!」

桐生「桐生ルーク、ガンダムアマツラ、出る!!」

第十三話　PL・LS003MS、ガンダムアマツラ（後書き）

ガンダムアマツラ

型式番号：PL・LS003MS

特徴：赤と白を基調にした額に金色のV字アンテナがある。

武装：両腕にビームトンファ（拳銃にもなる）

パイロット：桐生ルーク

桐生「武装少くないかい？」

作者「気にしたら負けだ」

ちなみに、空野の連結銃はガンダムSEEDのストライクフリーダムから貰いましたww

第十四話　模擬戦

空野と桐生は模擬戦をしている。

ルールはというと

・一発でも攻撃を食らったら負け

・どちらかが指定された場所を一部分でも出ると失格

と言う簡単なものだがこれでは桐生がつまらないと言い、

「負けたらジューズを奢る」

という賭けを持ち込んだ。

ちなみに、二人して浪費癖があり

そのため……………

ピチューン

空野& a m p・桐生「ジューズ奢りやがれええええええええええ」

空野がビームライフルを撃つ

それを桐生が回避し、

トンファアの先っちょからビームを出す

空野は飛行変形し、それをかわしながら桐生に突っ込む

そしてビームマシンガンを撃ちながら桐生の背後に回る

そして、ビームサーベルを袖から抜き出し、

右にビームサーベル、左にビームハンドガンの構えになる

空野「これで終わりだあああああ」

ガンダムアマツラの頭に振り落とす

それを桐生が右のビームトンファアで受け止める

ピッシー—————

桐生は左のトンファアからビームを撃とうとするが

ピューン

空野があらかじめ握っていたビームハンドガンからビームを撃つ
それがアマツラの左手にあたる

つまり、

空野の勝ちだ

そして艦に戻り、空野はしっかりジュースを奢ってもらったとさ

第十四話 模擬戦 (後書き)

空野「更新遅いぞ」

作者「ナニモキコエナイネ」

空野「そうかなら………クウタアバアレ……!」

作者「ギャ……」

――」

第十五話　低軌道接戦

現在、アマテラスの戦闘員とブリッジクルーは艦のブリッジに集まっていた。

飯島大佐「軍本部から事例が下りた。今から、地球にある軍の伊豆防衛基地へ一時帰島する」

これが、そのルートだ。

と、正面モニターにルートが映し出される。

飯島大佐「現在は敵も無く無事に地球にいけるはずだ。ただ、気がかりなのが一つ……」

というと、正面モニターが切り替わり、黒い影が一つと、白い影が一つ横切っている映像があった

空野「これは……」

飯島大佐「先ほどカメラで探知した。所属不明のMSだ」

マリ「でも、所属不明機とはいえ……この機動性、ガンダム並ですよ？ 私たちで勝てるかどうか……」

飯島大佐「心配するな、とは言えないが、一応注意のレベルでいいだろう。わざわざMSで大気圏突入なんてバカな真似はしますまい」

空野「でも、ガンダムも大気圏突入はスペック上可能ですよ？ 相手がガンダム以上の性能ならば……」

飯島大佐「スペック上は大丈夫だとしてもそんな危険なまねはしますまい。問題ないと言い切れんな」

%

かくして、アマテラスは地球の基地へ向かうために月から出港したのであった。

白いMSのパイロットside

白いMSのパイロット「目標艦、月基地の出港を確認。エネルギー充填率97%、砲撃まで後10second」

と、私は黒いMSのパイロットに通信を繋げる。

黒いMSのパイロット「了解。しくじるなよ」

白いMSのパイロット「わかっております、マスター。遠藤サヤ、レディアントガンダム。砲撃します！」

と、山吹色のビームが発射される

空野side

すごい衝撃といえいいのかかわからないが、とにかく砲撃を喰らったみたいだ。

そして、桐生ルーク、マリー・スペクトルと共に、出撃待機命令が出された。

そして、ソフィから出撃許可がおりた

ソフィ「前門1番2番ハッチ空けます。空野少尉が1番、スペクトル少尉が2番を桐生少尉は空野少尉に続いて1番ハッチから出撃してください」

桐生、空野、マリー「了解」

ソフィ「ハッチ開放1番2番出撃どうぞ」

「空野翔太、ヘリオスガンダム、行きますー!!」

「マリー・スペクトル、メビウスガンダム、発進します！」

ソフィ「続いて1番ハッチ出撃どうぞ」

「了解！桐生ルーク、ガンダムアマツラ、出るー!!」

第十六話　大気圏突入

艦から出てすぐに敵は見つかった。

隕石の影に隠れている事が分かり、悟られないように進む。

どうやら、向こうの機体はステルス性能が著しく低いのか、内観どころか、月のメカマンが開発したステルス性能が高すぎるかのどちらかだろう。

後ちよつとで奇襲をかけられると思ったところで、白い機体が姿を現した。所々青いラインがあり、白いV字のアンテナ。黄色のツインアイその姿はまるで……………

空野「あれは……………ガンダム!？」

そう。まだ月夜見が開発したのは三機しかないはずなのに第四のガンダムが現れたのだ。

そこに桐生から通信が入る

桐生『気をつけろ、俺もまだ信じられちゃいないが俺達以外のガンダムタイプのMSだ。一応オープンチャンネルで通信を入れてみる。もし応答しなくても攻撃はするな。攻撃してきたら攻撃しろよ。それと、油断するな』

空野・マリー「了解」

桐生『こちらは、太平洋連邦軍アマテラス所属ガンダムアマツラのパイロット桐生ルークだ。そちらの所属部隊名と官姓名をきつ貸せて貰いたい。』

遠藤 side

遠藤「マスター、通信が入りましたが応答しますか？」

マスター「いや、しなくていいだろう。それより攻撃しろ」

遠藤「了解しました」

桐生 side

マジかよおい！！

相手は通信にでどころか攻撃してきやがった。

とにかく、マリーと空野は無事か？

と通信機に手を伸ばそうとするしかし、

牽制といわんばかりに黒いMSから無数のビームが振ってくる。

桐生は内心で舌打ちしつつ防御体制をとる。

桐生「な！？ガンダムがもう一機だと！！」

まあ、考えてみれば一機あるんだからもう一機支援という形であっても無いはずが無い

つまり、他に数機あったとしても不思議ではない。

ガンダムアマツラはビームライフル兼ビームトンファア位しか武器は無いが最大の特徴は機動性が他の二機とくらべて格段に早い事である。

桐生「ドンだけ弾幕はつても当たらなきゃ意味が無いよ！！」

と無数のビームを掻き分け黒いガンダムの頭部に銃口となっている部分を殴るようにあて、そこで0距離からビームを発砲するそして腹部にライダーキックのような蹴りをお見舞いし、空野たちの援護へ向かう

そして、敵からの攻撃が無いのを確認し、空野達の無事を確認する。空野は二丁ビームハンドガンを連結させスナイパーライフルとして使い、マリーは砲撃して弾幕を張っているようだ。

再び遠藤 side

砲撃がやんだ？

なんでかは知らないけどチャンスだね。

と攻撃を開始しようとするがすごい勢いで何かが突入してきた。

遠藤「何あれ？戦闘機？もしかして特攻！？」

すると、翼の部分から鋭い刃が伺えるそれを上に上がり回避する

その戦闘機が通り過ぎたと思ったたら後ろで戦闘機がMSに変形した
と思ったら袖からビームサーベルを抜き向かってきた。慌てて肩か
らビームサーベルを抜刀し鰐迫り合いになる。

斬りかかつては鰐迫り合いし離れては斬りかかつてを繰り返してい
るうちに機体の周りが赤くなりはじめた。

コックピット内が暑い。目の前には敵がいる。その敵はきつと今止
めをさすだろう。ここで私の意識は途絶えた。

空野side

急に攻撃が止んだ。

にしても不自然だ。急に頭から落ち始めて・・・・・・・・..
ってまさか死ぬ気か！？

そして通信機に手を伸ばしオープンチャンネルで呼びかける

空野「おい！その白いガンダム！！聞こえたら返事しろ！！聞こ
えなくても返事しろ！！お前死ぬ気か？」

しかし、相手から応答は無い

空野「あーもう！シカトですかそうですか！コンチクショー！！」
と腕からカーボンネットを射出し、手首からワイヤーを射出させ敵
のMSに絡ませる。

この前のテロリストみたく自爆の気配は見られない。

敵MSにカーボンネットとワイヤーが絡まったのを確認すると飛行
変形してそれを引っ張る。

しかし、地球の重力というものはそれを拒むようにどんどん吸い込
もうとする。

空野「頼むから死なないでくれよ！」

空野は引つ張るのを諦め、その機体を庇うようにシールドを展開し、大気圏突入準備に入った。

そこに、アマテラスから通信が入る。

ソフィ「空野君！大丈夫？今からそっちに艦を動かすわ。MSの方もこっちに動かして」

とノイズまじりに聞こえる。よっぽど心配なのか声も震えてるし、いつも呼び合う名前で呼ばれた。

空野「了解しました。上にある緊急着艦装置を準備して下さい」

通信を返す。そして、上に持ち上げる事はムリでも横に引つ張る事は出来るので庇うようにしたまま艦のところに移動する。

そして、緊急着艦装置にMSが固定され、空野は意識の闇に堕ちた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1398s/>

機動戦士Jガンダム

2011年12月31日17時54分発行